

『INCHの楽しい仲間たち』 vol.15 その7

子どもはなぜ「危ない橋」を渡るのか（前編）

現代の「遊び場」をめぐって

宮坂朋彦（みややん・自然文化誌研究会 運営委員）

はじめに

子どもは、危ないところへ行きたがる。踏み外したら足が濡れると分かっているながら、頼りない木の板を使って川を渡りたがるし、落ちたらまあまあな怪我をしそうな石垣に登りたがる。「怖い」と言う子どもも多いが、キャンプ場に設置された「ハイジブランコ」はいつも人気だ。

近年、学校や公園といった日常の遊び場からは、こうした「危うさ」を孕んだ遊びが姿を消しつつある。もちろん、それは悲劇的な事故を防ぐためであって、「子どものため」になされた措置である。一方で、こうした安全重視の遊び場の変容に、どことなく物足りなさや違和感を覚えてしまう人も多いのではないか。

今回からはこのような問題意識のもと、一冊の本を紹介する。そのうえで、そこに描かれている「遊び」のあり方が、「冒険学校」にどのような示唆を与えるのかを考えてみたい。



1. 四つの遊び場

紹介したいのは、北村匡平著『遊びと利他』（2024）だ。映画研究者の北村氏が、自身の子どもが「遊び場」で見せる姿を出発点として、いくつかの特殊な遊び場取材して、そこに「利他的な空間」を見出そうと試みる一冊である。「利他」について詳しく書くと少しややこしくなるので、ここでは「遊び」に重心を置いて紹介しよう（「利他」が気になる人は実際に読んでほしい）。

さて、なぜナマステでこの本を紹介しようと思ったかという、この本のなかで紹介されている「遊び場」の特徴のいくつかは、自然文化誌研究会こすげ冒険学校の光景と重なって見えたからである。

本書のなかには、大きく四つの「遊び場」が登場する。都立府中の森公園（以下「府中の森」）、第二さみどり幼稚園（以下「さみどり」）、羽根木プレーパーク（以下「はねぎ」）、森と畑のようちえん「いろは」（以下「いろは」）である。以下では、これらの「遊び場」を簡単に紹介することを通して本書の議論の一端を紹介する。

2. 「府中の森」に見る「現代の遊び場」

四つのうち、「府中の森」は他の三つと異なり、どちらかと言えば「現代の遊び場」を象徴する場所として登場する。多くの「インクルーシブ遊具」が設置されたこの公園は、北村曰く、「子供に親切であると同時にトラブルを起こさないような管理が周到に行き届いており、「効率よく」遊ぶことができる」（p.80）という。

北村自身も指摘するように、「効率化」は悪ではない。しかし、「子供の遊びにおいて、行きすぎた効率主義や管理主義は、子供の創造的営みを抑制し、子供同士の利他的なつながりを断ち切ってしまうことがある」（同上）。この公園には「面白そう」かつ「安全」な先端的遊具がたくさんあるのだが、どこもかしこも「じゅんばんをまもる」「とびのったりしない」「ひとり10回まで」といったルールが貼られており、「遊び方」が細かく規定されている。また、安全性の観点から、保護者の目が行き届きやすい構造になっており、子どもが「隠れ家的スペース」もほとんどない。

多くの人々が理解できることと思うが、こうした「安全」や「トラブル回避」は、大人にとっての「安心」を担保する一方で、子どもにとっては「面白さ」とトレードオフになっている。実際、北村の子どもたちは「一通り遊具で遊ぶと、すぐ隣にある丘になった大きな広場に向かっていき、フリスビーやサッカーをして遊び出した」という（p.83）。

3. 効率主義・管理主義の落とし穴

ここでの問題は、「府中の森」が良い公園か悪い公園か、ということではない。過酷な子育てに追われる親にとって、安く、安心して遊べる公園は重要な選択肢の一つだし、インクルーシブ遊具は、身体的なハンディキャップがあっても安心して遊べるように配慮して作られたものだ。

しかし、こうした「制限」を前提とした公園が、「遊び場」の“典型”となるとしたら、どうだろうか。実際、冒険学校でも「安全性」はしばしば議論的となる。スタッフ・ミーティングや冒険学校後の振り返りでも「安全性」に言及をする人は非常に多い。またその際、「ルール」を作ったり「声かけ」をしたりすることで、子どもに「制限」をかけるかたちで対策したがる人も多い。効率性や安全性の追求は多くの人々が納得しやすい主張だからこそ、「もっと自由にしよう」という主張より浸透しやすいことも事実である。

だが、「安全」で「人に迷惑をかけない」制限された遊び方を経験し続けた子どもは、「遊び」の豊かな意義を十分に享受することができるだろうか。北村は「府中の森」における子どもの姿を以下のようにまとめている。

効率主義と安全性が行き渡った管理は、一方で不規則な動きや自由な「間」をあまり与えない。遊びに「余白」がなく、遊具によって「遊ばされている」ように思われた。しかも、遊びには本来「終わり」はないはずだが、ここでの子供は「終わり」をモノによって与えられている。そのことによって全体で見れば効率化しているのだが、それに喜びを見出せない子供がいるのも事実だろう。

(p.84)

子どもにとっての「遊び」が、時に「危うさ」を孕んだ「溶解体験」であることは、前回までの連載で見てきたとおりである。無論、「府中の森」的公園に溶解体験が皆無とまでは言わないが、「安全」に「迷惑をかけない」というのは、理性的で「大人」な振る舞いであって、遊びそのものと一体化するほど没入するような体験と異なるというのは、多くの人々が首肯できるはずだ。そしておそらく、こうした「遊び」の欠如は、大人になっても自分で遊べない、いつも何かに「遊ば（さ）れている」人——特に近年は、スマホやSNSといった、人間の生をコントロールする媒体が溢れている——が増えている、という漠然とした（ただしおそらく正しい）感覚と地続きであるように思う。先述した「安全性」を担保しようとする動向は、実際の安全以上に大人が「安心」するためのものであることも多いが、その一方で失われているこうした「遊び」の側面については、言語化が難しいからこそ、なかなか意識されることがないように思われる。

さて、北村が、「府中の森」に象徴される現代の管理された「遊び場」と対比して注目するのが、他の三つの「遊び場」に見られる、「遊びの転覆性」である。それは、子どもが遊具に「遊ばされる」のではなく、子どもの自由な遊びが遊具や公園の作り手の意図を超え、むしろそれを再創造するような事態である。今回は、「さみどり」「はねぎ」「いろは」の紹介を通して、この「転覆性」に迫っていこう。

[参考文献]

北村匡平, 2024, 『遊びと利他』 集英社.

(次回に続く)

